

学 会 録 事

1. 2016年度日本藻類学会第2回持ち回り評議員会

第2回持ち回り評議員会(2016年6月15日～6月29日)を開催し、日本藻類学会編「藻類の事典(仮称)」の出版計画に関する意見・賛否および項目選定委員への希望の有無を諮った。国内評議員16名中9名から回答があり、回答者全員の賛成により、提案の出版計画に則り「項目選定委員会」を立ち上げることとなった。項目選定委員への希望は6名であった。

2. 2016年度日本藻類学会第3回持ち回り評議員会

第3回持ち回り評議員会(2016年6月20日～7月2日)を開催し、次期会長候補者の推薦投票を行った。国内評議員16名中10名から投票があり、得票数5位までの方に対して学会事務局から推薦の可否の確認を行ったところ、了承された方が3名に達しなかった。その結果、今回の選挙では評議員会として候補者の推薦を見送ることとした。

3. 日本藻類学会次期会長及び評議員選挙の結果

次期会長・評議員選挙(任期:2017年1月1日～2018年12月31日)を2016年7月18日から8月6日にかけて実施した。2016年8月8日、東京海洋大学において、福岡将之会員、数野渚会員の立ち会いのもと開票を行った。その結果に基づき、各当選者の承諾を得て、以下の次期会長および評議員が選出された。

[会長選挙]

奥田一雄(当選);本村泰三(次点)

[評議員選挙]

北海道地区(定員1名)

堀口健雄(当選);四ツ倉典滋(次点)

東北地区(定員1名)

仲田崇志(当選);佐藤陽一(次点)

関東地区(定員3名)

宮村新一*(当選);菊地則雄(当選);北山太樹(当選);

河野重行(次点)

東京地区(定員2名)

鈴木秀和(当選);嵩田智(当選);田中次郎(次点)

中部地区(定員2名)

倉島彰*(当選);坂西芳彦*(当選);吉川伸哉(次点)

近畿地区(定員2名)

本多大輔(当選);宮下英明*(当選);大塚泰介(次点)

中国・四国地区(定員2名)

吉田吾郎(当選);村瀬昇(当選);関田諭子(次点)

九州地区(定員2名)

寺田竜太*(当選);川口栄男*(当選);グレゴリー・N・ニシハラ(次点)

日本以外の地区(定員2名)

Boo, Sung-Min*(当選);Zuccarello, Giuseppe C.*(当選);ANG, Put Jr.(次点)

(敬称略,*は連続2期目を示す)

4. 和文誌「藻類」バックナンバーの学会HPへの掲載状況

2016年7月14日現在、62巻2号までのPDF fileを閲覧・ダウンロードできる状況。

5. 学会HPによる情報配信と記載内容の更新

2016年6月～10月に掲載・更新した内容は、学会資料集(歴代役員、編集委員)、日本藻類学会第42回大会(仙台・2018)の大会会長・実行委員、日本藻類学会特別賞および学術賞(2017年授与)の募集案内、科研費・新学術領域研究(研究領域提案型)の公募案内、関東学院大学理工学部理工学科生命学系教員公募案内、日本藻類学会編「海藻の疑問50 みんなが知りたいシリーズ1」の出版案内、「日本海藻協会2016秋季シンポジウム」のお知らせ。

会 員 異 動

新入会

氏名

所属機関

所属変更

氏名

所属機関



藻類学会 64 年目 清末忠人会員が科博に海藻標本を寄贈

元鳥取県立博物館学芸員で現鳥取県博物館協会理事の清末忠人氏（85歳）が、長年にわたり収集されてきた海藻標本コレクション約 1000 点（押し葉標本）を国立科学博物館に寄贈した。

清末氏は、鳥取大学学芸部生物学教室卒業の翌年、昭和 28 年 4 月に、指導教官であった生駒義博先生の薦めで、創設もない日本藻類学会（昭和 27 年 10 月設立）に入会された。以来 64 年間にわたり学会費を休むことなく納め続けている。

このたびの標本寄贈は、ご子息の清末幸久氏（鳥取県立博物館学芸員）が、平成 26 年 2 月に当館の藻類標本室を視察されたことがきっかけとなっている。筆者が藻類標本のデータベース管理について実演する際、試しに採集者を「清末」で検索してみたところ、驚いたことにパソコンの画面には昭和 40 年代に採集された 30 件の鳥取県産海藻標本のデータが並んだ。問抜けにも「あれ？以前科博に来られたことがありましたか？」と訊ねた筆者に、幸久氏は「それ、親父です」とお答えになったのである。およそ 40 年前（寄贈日不明）に忠人氏から寄贈された標本であった。現在も鳥取自然保護の会や鳥取生物友の会の会長として、忠人氏が海藻採集を続けられていると聞き、筆者が標本の寄贈をお願いした次第である。去る 10 月 3 日、標本寄贈の打合せを兼ねて両氏がつくばへ来られ、標本と 40 年ぶりに再会された（写真）。

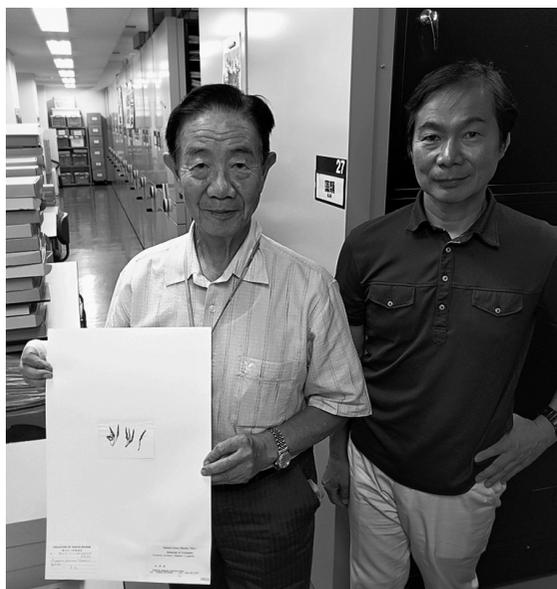


図 昭和 40 年にご自身が採集されたハネモの標本を手にする清末忠人氏（左）と幸久氏（国立科学博物館）。

忠人氏からは生駒義博のエピソードなど、海藻学史を勉強中の筆者にとって興味深い話を聴かせていただいたが、なによりも吃驚したのは押し葉標本のことである。海藻の押し葉をつくる者同志でしばしば話題になるのは「誰が段ボール板を使い始めたか？」という謎で、私もシダ標本で古くから使われていたことまでは調べていたものの、誰が海藻に持ち込んだのかをつきとめることができなかった。忠人氏によれば、鳥取大学でシダの研究を始めたところ、東京教育大学理学部の伊藤洋教授の研究室に内地留学したところ、伊藤教授がシダの押し葉作製で吸水紙と波形のトタン板の他にすでに段ボール板も使っていた。それはトタンの波板に圧力が加わったときにシダが波形に歪まないようするための工夫であったという。ある日それを見て「波板がなくても乾燥できましたよ」と進言したのが忠人氏であった。さて当時、同大学の臨海実習は下田の実験所に助手として勤務していた千原光雄氏（本年 8 月 17 日に逝去）が担当されていた。実習の応援に参加した忠人氏がシダの方法を薦めて、海藻の押し葉をつくってみたところこちらにも実にうまくいったので、その後海藻でも段ボール板が使われるようになったものらしい。（北山）